

# 第九章 敵上陸の危機遠のく

## (1) 長期自給態勢を確立

先島集団が宮古島で当面した問題のうち食糧の自給態勢の確立は一日もゆるがせに出来ない重要性をもっていた。宮古群島には一番多いときでおよそ七万数千名近くの人口を記録したが、戦争の拡大にともなって招集・徴用、島外疎開などが急速に行なわれた結果、集団主力進駐後十月頃は六万名足らずになっていた。然しそこには三万名の陸海軍将兵が加わったため、人口はおよそ九万名近くにふくれ上り、これだけの人員の食糧をどうやって調達するかが大問題であった。

集団は進駐当時、当面の需要をまかなえる糧秣を携行、更にかんりの量の追送を受けたので、主食の面では二十年三月二十日現在、精米及び玄米三、二二トンを保有、定量一人あたり一日七五〇グラム支給（支給人員は終戦時の調べて二万五千名、海軍は別）するとして五ヶ月間は維持できる計算になっていた。

然し七月以降敵の攻撃の重点が本土に向けられ、戦いの舞台は沖縄を通り越して本土へと移っていった。このため先島群島は戦斗の焦点から外され、取り残された感が強くなってきた。事実これを裏書きするかの如く間断なく続いた空襲は七月以降小規模且サミダレ式となり、一日に三十六機、二日四十機、十五日五機、二十九日十八機に減少、一機も姿をみせない日もあった。

集団では敵上陸の危機は去ったと判断、軍民の間にはようやく生色が取り戻した。然し戦いは何時果てるとなく続き、今度は飢餓と戦わねばならなかった。集団の保有糧秣のうち六十三％は上陸後十月迄の間に追送されたものだが、十一月以降は殆んど補給が杜絶えたため、手持ち食

糧の食い延ばしと自活による食糧の現地調達を強化する必要に迫られた。舟艇や機帆船による台湾からの糧秣、軍需品の輸送も考えられたが、敵哨戒機の見張りが厳重で成功する率は極めて少なかった。

宮古島では水田が乏しいので、主食の米は台湾からの輸送に仰ぎ、昭和十五年米の配給制実施以来、非農家成人一人当り一日平均二合三勺の配給量が確保されていたが、海上交通が危険になるに伴って輸送が杜絶え、十九年七月以降の配給量は一人一合八勺足らずとなっていた。配給業務は食糧営団支所が扱っていたが、二十年三月以降は空襲の激化で、配給業務は事実上停止状態となった。このため同月以降は非農家も主食を甘藷に依存するようになり、主食に占める甘藷の比重が絶対的となったが、日中は敵機が常時上空に所在していたため、農耕に支障を来し生産は思うように進まなかった。

集団では進駐以来主食の代用としての甘藷に着目、宮古支庁・各町村・農業会などの協力を得て民有畑の一部を供出させ、農耕班・漁労班などを組織して甘藷・生野菜の増産、魚介類の入手確保につとめる一方大野山林内に製紙工場、伊良部島に二カ所の製塩所、野原越に織物工場などを開設、自給自足につとめたが、所期の成果があらわず、ただ塩のみが必要量の六十％を充足する程度に止まった。

集団の将兵は上陸以来飛行場造り、陣地構築、教育訓練などに苛酷な労働を強いられ、給養の低下、居住条件の悪化、医薬品の払底などの悪条件が重なり、栄養失調、マラリア患者が続出、陸軍関係の戦没者二、四〇九柱の大部分が栄養失調、マラリアなどの悪疫によるものだった。このような将兵の体力低下は戦力を著しく減殺するものとして集団でもその対策を重視、更に長期駐留に備えて食糧の自給自足に本腰を入れることになり、左のような方針を樹てて主旨の徹底につとめた。

幸いに七月からは空襲も小止みになり、日中の農耕作業も可能になったので、軍民の総力を挙げて自活態勢強化に取り組み、民間人にまじって甘藷の植付け、畑の手入れに精出す将兵の姿が見えられ、成果があがるようになった。

## 宮古島軍民自活態勢確立策案

### 方針

軍ハ周到適切ナル計画ノ下軍官民ノ持久自活ノ態勢ヲ確立シ民ノ勤勞精神ヲ最高度ニ発揚セシメ生産力ヲ画期的ニ増強ス 民ノ自活態勢ヲ確立スルト共ニ軍ヘノ食糧協力ヲ強化シ軍ノ戦力ヲ拡充強化ス

### 施策

#### 其ノ一 軍隊側

一、徴備民力ノ整理  
民ノ徴備茲ニ奉仕ヲ最少限ニ制限シ帰農セシム 徴備人員ハ新タニ示ス備給費ノ制限内ニ於テ地区隊長ニ於テ審査決定認可ス 奉仕的ノモノモ同シク地区隊長ノ認可ヲ要ス

二、軍徴民の自活  
軍徴民ニハ総テ自活ニ必要ナル農耕ヲ実施セシム 之カ為メ徴備部隊長ハ所用ノ時間ヲ与フルモノトス

三、特設警備部隊ニ対シテハ農繁期ニ於テ所用ノ自活休暇ヲ与フルモノトス

四、徴備ノ賃金ハ集団ニ於テ決定示達スルト共ニ各部隊ニ対シテハ備給費ヲ制限配当ス

五、軍需畑甲ノ管理ヲ適正ニシ農耕督励班ノ活動ト相俟チテ軍ヘノ食糧供出ヲ根本的ニ刷新セシム

六、軍需畑乙ヲ極力向上シ軍自活態勢ヲ強化ス

民ノ農耕勞務ト供出ノ成果トニ鑑ミ逐次軍需畑甲ニ転換ス

- 一、食糧増産一本ニ民力ヲ結集シ全農主義ニ徹底ス
- 二、農家ニ対シテハ其ノ農耕能力ニ応スル軍需畑甲ヲ配当セシメ責任制ヲ以テ確實ナル供出ヲ実施セシム
- 三、甘藷茲ニ野菜類ノ公定債務ヲ決定シ之カ取締ヲ至嚴ニシ嚴罰主義ニ依リ確定ス
- 四、非農職域ヲ厳選決定シ之ニ対シテハ甘藷ノ配給制ヲ実施ス
- 五、軍ノ徴備者等ノ帰農ト共ニ民ノ勤勞動員運動ヲ強力ニ実行ス

## (2) 給与状況、全般に悪化

終戦後の二十年九月第二十八師団経理部では先島集団の給与状況などについて次のような報告を復員参考資料として提出している（石垣島・大東島関係を除く）以下はその主なる抜粋。

進駐以檢本年九月二十六日迄ノ補給糧秣ハ別表第一ノ通りナリ 本糧秣ノ約六三％ハ昨年七月ヨリ十月迄ノ間ニ追送セラレシモノニシテ爾來輸送ハ全ク杜絶セラレタリ 之カ為集団ハ本年七月以降特ニ主食ノ給与量ヲ減少シ甘藷ノ供出ヲ奨励シ他現地自活ニヨル甘藷ニヨリテ常ニ（八字不明）糧秣ヲ保存シ得シ次第ナルモ別項ニ記載スル如ク甘藷ノ現地自活ハ天候其ノ他ニ依リ今尚低調ナルタメ今後ノ主食ニ対シテハ特ニ憂慮シツツアル現況ナリ（以下略）

(一) 宮古島ニ於ケル給養現況

九月中ニ於ケル給与状況ハ別表第三ノ通りナルモ玄米ノ如キハ帳簿上ノ給与量ニシテ各部隊ノ長期保管中ノ損廢乱糶等ノタメ実給与量ハ三五〇乃至三七〇グラム程度ナリ 目下ノ玄米給与量ハ長期ニ亘ル將兵ノ体力低下ヲ回復セシメンガ為特ニ増給セシメアルタメ日量四五〇グラム程度ニ上リタルモ副食物無キ為給養ハ良好トハ言ヒ難キ状況ナリ 而モ現在ノ給与量ヲ継続センカ補給少ナキ現況ヨリ前途暗澹タルモノアリ 之カ解決策トシテハ台湾ヨリ補給強化ヲ仰ク

カ将又急速ナル内地帰還ニヨル以外途ナキ現況ニアリ

(一)被服事項  
被服ハ昨年出發時ノ裝備ニシテ上陸以來襦袢袴下及毛布補修材料等一部補給ヲ受ケタルモ進駐以來一カ年余ヲ経過シ此ノ間急速ナル飛行場作業ト陣地構築等ニ依リ衰損度甚ダシク殆ンド装外廢品程度トナリアリ(一部略)

特ニ先島集團ハ冬季ニ於テハ相当温度低下シ出發時ノ裝備ニテハ保健上憂慮スベキ状況ナリ

尚本島ニ於ケル被服ノ劣悪ナル状況ハ第三十二軍ニ於テモ特ニ考慮セラレ昨年度ニ於テ冬季用毛布一人三枚、冬襦袢袴下各二組宛補給セララル筈ナリシモ船舶ノ關係上不能トナリ其ノ後補給モ全ク不能トナリ現在ニ至レリ

戰爭終結後ニ於テ台湾軍ヨリ襦袢約一四、〇〇〇着 袴下八、五〇〇着 補給ヲ受ケテ更新ヲ実施セリ

(二)需品事項

進駐以來補給セラレシ需品トシテハ僅少ナル日用品、塵紙、事務用消耗品、殺虫剤、防虫剤ナルモ過去一年間中ニ於テ殆ンド消費シ現在保有シアルモノハ極メテ少量ニ過ギザル状況ナリ

(四)建物構造施設(略)

(五)建築資材

追送資材ノ利用殆ンド不能ニシテ現地資材松丸太、茅、茅繩等使用ニ努ムル一方疎開民家解体材料五百棟(約一万坪)分ヲ購入シ建築資材ニ充當シ稍々効果ヲ挙ゲ特ニ患者収容施設ニ利用セリ

(六)現地自活

(1)農産(甘藷)

集團ハ進駐当初ヨリ糧秣補給ノ困難ナル状況ヲ察知シ本年一月ニハ甘藷ニヨル完全自活ヲ樹立シ九月以降ハ完全自活態勢ニ移行スベク三月以降毎月兵一人当リ二畝植付ヲ実施セシメ七月ニハ一人一反一畝ヲ完了スル予定ナリシガ各部落ノ努力ニモ不拘三月以降ノ空襲ノ

ザル現況ナリ

(2)被服

本島産苧麻及竜舌欄ヲ以テ補修材料ヲ織布シアルモ被服ノ衰損甚ダシク所要ヲ充足シ得サル状態ナリ 現在迄ニ約二、三〇〇米ノ生産ヲ揚ケシノミナリ

尚苧麻ハ現地資源僅少ニシテ現在台湾ヨリ綿麻混紡糸ヲ購入シ使用中ナリ

(3)需品

紙ノ自活ヲ企図シ五月以降生産ニ従事セシモ技術者少キタメト製造所付近ガマラリヤ地帯ナルタメ成績ハ不良ニシテ五月以降終戦迄生産セシ和紙ハ六、〇〇〇枚に過ギザリキ

(註)各別表略

(一)九月下旬分給与分量(一人一日)

玄米	四二九グラム
甘藷	三七四 "
生野菜	三〇六 "
魚肉	三六 "
缶詰肉	七六 "
味噌	一 "
粉味噌	一〇 "
醤油	〇、〇〇〇三立
粉醤油	一〇グラム
砂糖	二七グラム
食塩	一八 "

(註)給与人員二五、〇七〇名(但し)實際の給与分量は本表に示された数字より下回っていたのではないかと推定される)

(二)九月二十日現在の調べによると集團保有糧秣は玄米一、二九一ト、乾パン一九八ト、粉醤油二七ト、食塩三九ト、砂糖三八ト、トンなどが主なもので、ほぼ二ヶ月間を支える量にあたる。

激化ノタメ予期ノ進捗ヲ見ザリシ一方初期ニ於ケル植付技術ノ拙劣ト六月中ノ干魃ト禍セラレ植付面積ハ今尚一人当五、五畝余ニ過ギザル現況ニシテ到底完全自活ハ不可能ナル概況ニアリ、且終戦後ハ台湾ノ中国領属ニ伴ナイ 台湾所在船舶出港禁止ト宮古島ニ於ケル船舶不足ニヨリ玄米ノ補給ノ途殆ンド杜絶シアリ 之ガタメ内地帰還ノ順調ニ推移セザル場合ハ甚ダシキ状況ニ至ルモノト憂慮シツツアリ

(2)製塩

製塩ノ現地自活ハ甘藷ニ次グ主要ナル事業ニシテ集團ハ進駐直後特ニ意ヲ之ニ注ギ製塩場ヲ二箇所ニ開設シ銳意之ガ増産ヲ計リ最近ニ於テハ別表第五ノ如キ成績ヲ挙ゲ特ニ八月ニ於テハ集團所要量ノ約六〇%ヲ確保シ得ル程度ニ達シタルモ終戦後ニ於テハ天候不良ノタメ甚敷成績不良トナリ今後モ亦冬期間ハ遺憾乍ラ自活不可能ノ予定ナリ

(3)進駐当初ヨリ補給セラレシ缶詰

ハ戦斗用トシテ使用ヲ嚴禁シ他面獸肉資源僅少ナル本島ノ肉資源ハ挙ゲテ魚肉ヨリ確保スベク鯉漁業クリ舟ニヨル雑魚ヲ大々的ニ実施ノ計画ヲ樹立セルモ三月以降ノ空襲ノタメ鯉漁業ハ全ク不可能トナリ決死的作業ヲ以テクリ舟ニヨリ雑魚ヲ獲得シ別表第六ノ如キ成績ヲ挙グルヲ得タルモ終戦後ハ民営トナリシタメ天候ノ不良ノタメ其ノ成績モ亦不良トナリタリ 之ノタメ集團ハ八月中旬以降缶詰肉ヲ使用シ肉食不足ヲ補充シツツアル現況ナルモ缶詰ノ手持数量ニモ限度アリ冬期ノ漁業不振期ヲ前ニシテ憂慮シアリ

(2)味噌

主要原料タル大豆、小麦ノ現地獲得量ハ收穫期ニ於ケル降雨続キノ為極メテ少量ニシテ次期ノ種子用トシテ充足シ得ル程度ニ過ギザリシタメ味噌ノ自活ハ甚ダ低調ニシテ別表七に示セル量ニ過ギズ集團ハ之ガ不足補充ノタメ目下粉味噌、粉醤油ヲ給与セシメツツアル現況ニシテ保有量モ日量十グラムトシテ今後二ヶ月余ヲ有スルニ過ギ

(3)先島集團主力の宮古島進駐後、大量の糧秣が船舶利用で追送されたが、十月以降は海上交通が危険となり、殆んど補給は杜絶した。追送された主要糧秣は次の通り(単位トン)

白米	四七三	玄米	七、四〇五
砂糖	一、二〇四	食塩	三七八
茶	五二	鯉節	四五
甘味品	二一	大豆	三九
小豆	一五	小麦粉	三三
漬物	二五	乾麵包	一二〇
缶詰	四五〇	味噌	二五九
醤油	一九六、五四七リットル		
食油	五、五〇八 "		
清酒	一〇、四〇八 "		
煙草	五七〇一、四〇〇本		
携帯食塩	一、一一〇キログラム		
砂糖	一、六二〇 "		
その他	一五、〇〇〇 "		

四海軍関係の給与状況については資料がないので、明かでないが、陸軍に比べるとかなりゆとりがあったのではないかと思われる。

(5)なお集團の保有糧秣は復員後民間に払い下げられ、戦後窮迫した食糧事情緩和に役立った。

(註・別表は省略した)